

平成五年度史学研究会発表要旨

石との対応の文化史 — 「無言の石」の語るもの —

後藤重巳

石（岩）の穴に棲み、岩に絵画を描き、石を割り削って道具を作るなど、人と石との対応の歴史には古く、久しいものがある。岩山や立石には神性が宿るものと考え、「さざれ石が、巖となる」とする『古今和歌集』の「君が代」の歌を始め、霊石が成長するとする各地の「袂石」に係わる民話など、石に係わる話にはおよそ事欠かない。

岩石は、まずその資財としての利用の問題と信仰（民俗分野）の問題とに分けて考えられる。資財としては、住居・土木建築（橋・堤防・道路・垣・暗渠ほか）、道具（石器・臼ほか）、墳墓（石室・石棺ほか）、城廓、石塔碑など利用の分野は枚挙に暇ない。

江戸時代中期の享保九年（一七二四）近江国滋賀郡下坂本村（現在の天津市下坂本町）に生まれた木内小繁（号・石亭）は、十一歳の頃から岩石に興味を持ち始め八十五才で天寿を全うするまで、石の虜になった。彼の石に係わる記録が著名な『雲根志』である。日本考古学者の斎藤忠氏が、『木内石亭』なる人物志を著したのは『雲根志』中に考古資料としての「石器」が多くスケッチされていることに起因している。時の科学者・平賀源内と親交のあった石亭は、閑を見付けては旅をし、石に関する珍しい事に接すれば、それを選別せずに集めた。「神代石」と考えた考古資料、「天狗の爪」と称した鯨の歯の化石など、彼は石の博物学の先駆者であった。

石亭ならずとも、人々はいつの時代にも、常に石との必然的な対応関係を通じて来たのである。新しくは、柳田国男の『石神問答』は、石信仰に係わる民俗問題について、多大な課題を提起した。

さて、日本最古の地誌『古風土記』には、石や岩に係わる多くの説話が記されている。古典説話に見える石信仰では、石そのものに超自然的な力が内存するという考えと、石に神霊が降臨・憑拠するという考えなどがある（『日本社会民俗辞典』など）。これらの石信仰は、石の巨細・所在場所・形状・色彩など、色々な条件によって異なる。

以下、古典に見える石に係わる説話や信仰のいくつかについて事例を見よう。

『出雲風土記』盾縫郡神名樋山の条によると、この山の西の「石神」は、高さ一丈・周囲一丈で、その傍らに小さな石神が百余ある。古老の伝えによると、アジズキタカヒコの命（みこと）の妃であるアメノミカジヒメが、たくの村に来て、タギツヒコの命を生んだ時、命の社はここがいいといった。このため、この石神は、タギツヒコ（多岐都比古）の御霊となり、天下の雨乞に靈験がある。

また、飯石郡琴引山にも「石神」があり、それは高さ二丈余・周囲も二丈余あるという。

『播磨風土記』揖保神島の浦上の里には、島の西部に「石神」があり、形が仏に似ているため呼称したものが、これを毀損した新羅人が神罰を受けた。また、回国少宅（おやけ）の里には、「石神」が棲む「神山」がある。

『肥前風土記』によると、神崎郡船帆の里三根川の津には、「沈（いかり）石」四個があり、一つは高さ六尺・回り五尺、一つは四尺・五尺、この二石を無子の婦女が拜めば必ず妊娠する。残る二石は一石が四尺・五尺、三尺・四尺あり、日照りの時、雨乞をすれば、必ず降雨があるという。同書の佐嘉郡の条には、佐嘉川の川上の石神は「世田姫」といい、海神が毎年参詣するが、その折、多くの鮎が同道する。この鮎を人間が食すると死ぬという。

石に係わる説話は、「諸国古風土記」のほか、『日本書紀』など六国史や他の古典の中にも散見し、古代おける石信仰の実態を垣間見ることができる。

記紀に見える天照大神の岩戸隠れの話や、イザナギノミコトがその妻イザナミノミコトを求めて「黄泉の国」に行き、醜態を見られた妻が、現世に逃げ返るイザナギを追って来るが、イザナギは「黄泉のひらさか」で、「千引岩」をもって「黄泉塞大神」としたという話などは、古代史における石の構造物や石の持つ霊力を物語るものであろう。

石に係わる民俗の問題でも、さまざまの興味のある問題が展開する。

西北九州から薩南諸島・琉球諸島にかけて、各地の海岸部に「立神」と呼ばれる立ち岩や岩山が散在する。この「立神」は、海上航海者の航海安全祈願の聖地として神霊視された。なかでも、奄美大島の名瀬港の「立神」は名高く、今だに信仰の対象となっている。これら「立神」は、海上沖からいち早く航海者の目にとまり航行の標識になったため、道案内の神として信仰されるようになったものであろう。

石をもって、「年占」をする「印地打」や「石合戦」「力石競べ」などの風俗が古典にも見える。「景行紀」に見える「蹴石」の話も、石を用いての占いの習俗を示している。

石をめぐることは、その社会経済史的な面からも関心が持たれる。

古くは、石器時代における「黒輝石」の流布の問題は、古代における資材流通に関わる興味ある問題となる。近世期、城廓建築における石垣とその石材需要・運搬の問題も重要である。城廓石垣の巨大石、いわゆる「大名好」石の需要と供給は、たとえば著名な大坂城の巨大石だけを取り上げても興味深々としたものがある。

近世城廓建築の問題に関しては、多分に伝承的な内容に終始し、膨大な量の石材供給地が、未だ鮮明にされていない事例が多い。

城廓建築に関しては、その技術面に関しても、未だ鮮明でない事例が多い。城廓建築が外聞を憚る秘密工事であることからか多くの伝承を生む。九州各地の城郭において、加藤清正が築城に関与したという伝承が多いが、事実関係は甚だ疑わしい。また、石工として、穴生石工が参加したという伝承も各地にあるものの、事実としては疑わしい点が少な

くない。

石材加工に関わる石工は、著名な穴生石工の特殊性よりも、むしろ、民間における石加工技術での耕地の石垣、家屋敷における石垣築造技術の問題に関心が持たれる。特に、九州各地における近世末期の「石橋」築造をめぐる問題は重要であろう。

岩石の利用は、屋敷・礎石・石畳・石置き屋根・石橋・石樋・石臼・石棺・石塔・砥石など、驚くべき多様性を持っている。また、「石」は、特殊鉱石として翡翠・ダイヤモンドを始め、古代以来、人々を魅惑する「寶石」としても社会史を飾り続けている。

信仰史において、木材よりも技術的に難度の大きい石材を用いて仏神像を彫刻したということへの疑問もなくもない。こうした面から考える時、石をめぐる問題は、今後さらに多くの研究課題を提起し続けることとなろう。